

# 第48回日本水環境学会年会学生ポスター発表賞(ライオン賞)を受賞して

日本大学理工学部土木工学科 滝本 麻理奈

この度は、日本水環境学会年会学生ポスター発表賞(ライオン賞)を授与いただきまして誠にありがとうございました。ライオン株式会社の皆様、学会関係者の皆様、そしてポスターや発表をご覧いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

本研究では、環境省が推進している水環境の総合評価手法「水辺のすこやかさ指標(みずしるべ)」(水環境健全性指標2009年版)について、その調査結果の定量性に関する検討を行いました。この指標は評価者の感性を用いて評価を行うことができるのが最大のメリットであり、そのため環境教育の現場では子供たちにも親しみやすいツールとして多く使用されていますが、水環境の評価ツールとして活用するためには、より高い定量性を確保する必要があると考えました。既往の研究では、調査地の環境条件や評価目的等に合わせて指標の再検討や改良を行った例もありましたが、私はなるべく既存の指標の枠組みを残しながら、できるだけ客観的な分析に基づく改良を目指したいと考えました。このためにまず、指標の全質問項目を大きく3つ(区分S:主観(subjective)的評価項目, 区分O:客観(objective)的評価項目, 区分OS:客観的に見えるが主観的な評価項目)に分類しました。指標に大きなメリットを与える区分Sと定量性が保証された区分Oを現状維持し、区分OSを中心に改良することが望ましいと考えました。また、同一人員で異なる地点を調査したデータ、同一地点を異なる人員で調査したデータを複数用いて、各質問項目に対する結果のばらつき度合を検討しました。これらの結果より、区分OSの中で、結果のばらつきが大きい傾向にあ

る質問項目を中心に改良を行うことで、変更を最低限にとどめつつ指標全体の定量性を改善できる可能性を示すことができました。

この指標は、環境評価を行う土木的な側面と、環境教育を行う教育的な側面を持っています。私は自分の専攻である土木工学と同時に、教職課程において教育学を学んできたため、どこか自分と重なる要素を持つこの指標の研究に、いつの間にか興味を持っていました。しかし、この研究は文系的な要素をはらんでいるため、指標自体の概念や使用法を含め、他者に自分が検討・分析してきたことを(特にこの指標を使用したことのない方々に)理解していただくのは大変困難なことでした。そのためこの1年は、自分は本当に好きな研究をしているという幸せな気持ちと、この研究をやりきることができないのではないかという不安な気持ちが隣合わせでした。だからこそ会場で、大学院に進学してからもこのテーマで進むことを応援して下さるお声をいただくことができましたことが何よりも嬉しく、発表を終えた日は晴れ晴れとした気持ちで会場を後にしたことを覚えています。これからもこの当時の気持ちを心にとどめ、日々精進して参ります。

最後に、1年間温かいご指導を賜りました日本大学理工学部土木工学科 小沼晋先生、齋藤利晃先生、そして調査にご協力くださいました卒研究生・ゼミ生の皆様に衷心より感謝申し上げます。私が今まで指標の研究を続けることができたのは、皆様のお力添えのお蔭です。これからも何卒宜しくお願い申し上げます。